

臨床家の 声を訊け

講師リレー連載 第3回

はりきゅう実技/良導絡治療セミナー担当 北村 智 先生

20年程前に臨床を取るか、それとも教育を取るかの二者択一を余儀なくされ、今後、どの道を進むべきかを選ぶという人生の岐路に立たされた。

過去の臨床・教育の現場での取り組みを振り返り、「自分はどちらが適しているだろうか。いや、どちらの生活が楽しいだろうか」と考えた末に、大学の講師としての道を選択した。恥ずかしい話だが、臨床家・治療家としての自分を捨てたのである。と言いながら、身体の具合の悪い学生がいるとついつい治療をしてしまうのは、治療家の血が騒ぐからであろうか。

学生には「国家試験に合格すれば誰でも鍼灸師にはなれる。しかし、資格は取れても誰でもが治療家・臨床家になることは難しい。「師」になるのは比較的簡単だが「家」になるのは難しい。そのためには、学生時代にしっかりと基礎的な学問と技術を修得し、そして卒業してからも、より熱心に研鑽・修業を積まなければ、患者から喜ばれる治療家・臨床家にはなれない」と1年次の最初の授業で話すことにしている。

治療するということは、患者の苦痛を和らげ、病を治し、心を癒すことである。「学」と「術」の両輪を身につけ、その上に、人としての穏やかさ、心のゆとりを備え持たなければ、病める人の心身を安らげることは難しい。「学」・「術」・「人」が三位一体となったとき、病める人を救うことが出来る「治療家・臨床家」が誕生する。勿論、教育にもこの「三位一体」は欠かすことのでない要件である。しかし、すべてをパーフェクトに備えることは不可能に近いことであろう。どれか1つでも2つでも備え持てば、より良い治療家になれるかもしれない。私の同窓生に「学」は普通、「術」は???という学生がいた。誰が言うともなく「開業しても患者は来ないよ」。しかし、開業すると数年で門前市をなす繁盛で、びっくり。彼には商才があり、また「人柄」がずば抜けて良かったので、人が寄り集まったのである。自分自身を第三者的に観察し、自分の長所を伸ばし、短所を補うように努力すれば、必ず道は開けるはずである。学生諸君。脇目を振らず初志貫徹。

私が臨床より教育をlifeworkとして選択したのは、患者を治療し、病を治して喜ばれる事も楽しいけれど、後進の指導、特に自分の技術を伝える事に意義を感じ、また、もっと、もっと楽しいのでは.....と考えたからである。しかしまだまだ未熟者。反省。

現在の私があるのは、大学受験で挫折した時に、東洋医学の道があることを示唆してくれた伯父(産婦人科医)臨床と研究の楽しさを教えてくれた良導絡の創始者の中谷義雄博士、臨床に取り組む厳しさ、後進の教育の大切さを身を持って示してくれた義父和田清吉(関西鍼灸大学名誉教授)そして、ホモ達と噂されながらも、めげることなく30数余年の長きに亘り、変わることなくお付き合いを戴いている森川和宥先生(東洋医療専門学校 鍼灸師学科 前学科長)のお陰である。深謝。



ガラビジ通信

ネック=チャンドの彫刻庭園

鍼灸師学科 副学科長 真田 浩二

芸術や創作とはまったく無縁だった人が、ある日を境に突然、ただ「創る」ということだけを目的に、猛烈な勢いでひたすらなにかを創り出すといった例が、古今東西問わず相当数ある。それは、絵筆などもったことのない老女であったり、炭鉱夫であったり、精神を病んだものであったり、交霊術をおこなう霊媒師であったり、発達障害をもつ子供であったりさまざま。だが、彼らの作品はなにか懐かしさを感じさせる感覚を惹き起こせる力をもつ、という点が共通している。彼らの創作物は、ユングのいう「原始心像」ということばにもっとも的確にいいあわらされているかもしれない。世界中のプリミティブアートや、土偶や、先史時代の洞窟壁画と同じ臭いがする。大脳皮質ではなく大脳辺縁系、あるいは、はらわたのもっとも深いところに訴えかけてくる。左脳でなく右脳が刺激される。美術大学で技術や技法を学んだものには決してだすことができない「味」がある。

そんな「芸術家」のなかで、インドのネック=チャンドはわたしがもっとも好きな作家の1人だ。2006年正月休み、チャンドの作品をみるためにインド行きを計画したが、さまざまな理由でいくことができず、変更して訪れた欧州はスイスのローザンヌにある「ART BRUT COLLECTION」を訪れたときに、その美術館の企画展が偶然にも「チャンド展」だったことに縁を感じ、その夏にインドへむかった。コルピュジエが都市計画を担ったチャンディガルという町にある「ロックガーデン〔彫刻庭園〕」である。ここにはチャンドが創作した夥しい数の彫刻が展示されている。灼熱の炎天下で、まさに時間を忘れて彼の作品を鑑賞した。それらはコルピュジエのすばらしい建築群をはるかに凌ぎ、表現するなら「全身が太古の海に包まれる感覚」とでもいうべきか。いや、ことばでは表現はできない。

チャンドは1924年生まれのごく平凡な交通局員。そんな彼が1958年、34歳のころから政府の土地を無断で開墾し創りはじめたのがこのロックガーデン。石や廃材を利用してたった1人で作品を創ること数年、そこはやがて政府に発見され問題になる。ところが1972年に政府はそのすばらしさを認め、チャンドにその作業に専念することを命じ、作業員と給料を支給することを決める。現在もチャンドのエネルギーは衰えることなく、作品を創り続けているということである。彼の作品は世界中の美術館でも展示されている。

私がここに立てたのは神と女神なのです 彼らは魂をもっています 私は彼らを見つめ、そして彼らは私の心に触れてくるのです ネック=チャンド

